

【研究ノート】

経験と歴史の断絶——『志段味古墳群』の検討

Discontinuation of Experience and History: Examination of “Shidami Kofun-gun”

犬塚康博

INUDZUKA Yasuhiro

要旨 『志段味古墳群』（2011年）は、名古屋市教育委員会が計画する「歴史の里」のために実施された発掘調査等の報告書である。同書には、リテラシーの過失が複数認められた。ヘーゲルを参照するとき、同書の意味は「経験と歴史の断絶」にあることが仮説され、文化財保護の断絶、諸学との断絶に概括できるいくつかの徴証がこれを支持した。区画整理によって、地域の生活世界の経験と歴史が物質的、精神的に断絶されてゆくなか、古墳群を再編するのが「歴史の里」である。『志段味古墳群』の断絶性がこれを拘束し、さらに神話的世界の「尾張氏」が援用されてこの断絶を糊塗する。ここに、歴史のサブカルチャー化が予感されるとともに、天皇制を内面化した敗戦前の歴史の再演もが想起された。『志段味古墳群』のいわゆる「非科学的な考古学」は、現在の安倍政権等による、対中国を頂点とした戦争機運醸成ならびに戦争体制整備としての中央集権強化と同期するのである。

1. はじめに

筆者はこの30余年、名古屋市博物館部門展『守山の遺跡と遺物』（1984年）をはじめとする収集・保管、調査・研究、公開・教育の活動や「志段味の自然と歴史に親しむ会」の活動そのほかを通じて、名古屋市守山区の上・中・下志段味と吉根の4地区（以下、志段味・吉根地区と称する。）に注目してきた。特定土地区画整理事業が終了または進行する、この地域の人びとの生活世界において、文化財はどのような意味を持つのか。この問いは、当初こそ漠然としていたものの、次第に獲得されてきたと言える。この経験に接続して本稿は、『志段味古墳群¹⁾』（以下、『志段味古墳群』と称する。）の検討をおこなうものである。

『志段味古墳群』は、名古屋市教育委員会が上志段味に計画する「歴史の里」の設置に先立ち、5ヶ年度にわたって実施した発掘調査等の報告書である。上志段味は、古墳群が発達し保存状態もよかったことから、公有化による整備、公開が期待されてきた。このことを直接に提起したのは、1981年の『志段味地区文化財の取り扱いについて²⁾』であるが、1970年には、名古屋市文化財調査委員だった考古学者の吉田富夫が、市内の7遺跡を例示して史跡公園の可能性に言及していた。その半数近くの3遺跡が上志段味の古墳であったことに明らかなごとく、この地区の古墳の保存・公開が、関係者のあいだでは課題にのぼっていたのである³⁾。

ところで、1970年当時に名古屋市で公園化が具体化していたのは南区の見晴台遺跡で、1971年にマスタープランが作成され、1979年に資料館が開館している。しかし、それ以外の遺跡の整備、公開は進捗せず、見晴台の次に「歴史の里」が続く格好となった。見晴台と「歴史の里」のあいだの40余年にあるのは、調査され破壊され尽くした累々たる遺跡で

ある。なお、見晴台遺跡の施設と事業は、1972年の第10次発掘調査以降、社会教育としての位置づけを明確にもつ社会教育行政の所産だが、「歴史の里」は教育委員会が所管するものの一般行政の観を呈している⁴⁾。以下、注意された問題点を列記する。

2. 第1の検討

1) 大久手3号墳

大久手3号墳の、1982年の「現況は周囲より約1m高い荒地。南側の断面に拳大で横一列の礫層がみられる。畑の西南隅（×印）で須恵器杯（下図）表採⁵⁾」であった。この須恵器杯は、『志段味古墳群』で「1981年の表採品⁶⁾」とされたものと同一物だが、「採取地点は南東拡張トレンチあたりの畑地⁷⁾」ではなく、南西拡張トレンチあたりの畑地である。筆者が採集し、同行者（当時、名古屋市見晴台考古資料館職員）を介して同館保管となった経緯を有する。

ここでは、遺物の情報に混乱が見られた。そして、礫層の情報が欠落する。1982年当時、礫床の可能性を論じる根拠ともなった礫層である。その後、墳丘の削減が進行し礫層が失われたとしても、礫層の情報が消滅したわけではない。礫層の情報の欠落によって、礫床が発掘調査の検討項目から遺漏した。これを仮に、遺跡・遺物の情報とのコミュニケーションを成立させるリテラシーの過失と評しておこう。

2) 大久手4号墳

大久手4号墳について『志段味古墳群』は、「周溝、葺石、埴輪、須恵器等古墳にかかわるような情報を得ることはできなかつた⁸⁾」と結論するが、1982年の現況は、「墳頂の西南隅に河原石が集中している。東側斜面で須恵器甕片（下図）表採⁹⁾」であった。情報は存在したし、得られるようにも存在してきた。リテラシーの過失が、ここにもうかがえる。

3) 大久手5号墳

大久手5号墳の墳丘と大久手池の堤防との関係については、過去に2度、言及したことがある。1度目は、「一八八八年調整の「土地製理図（東春日井郡上志段味村）」（館蔵）で見ると、同地（大久手5号墳のこと—引用者注）はずでに大久手池堤防にとりこまれており、池側が字外のため白紙になっているが、字内残存部の状況はよく判る¹⁰⁾」と書き、2度目は「大久手5号墳は、墳丘の東半分を大久手池の堤防にとりこまれているが、西半分は良好に残っている¹¹⁾」と書いた。改めて言うまでもなく、両者に共通して用いた「とりこまれて」の意味は、「墳丘の南東側の半分は堤防の中に残存している」である。発見した1983年当時、大久手池の堤防の水面側は土が露出しており、埴輪片、須恵器片の散布を確認したことに基づいている。

墳丘と堤防の関係について『志段味古墳群』は、「墳丘は現況盛土および大久手池周堤内部にて、周濠は現地表から視認できるように、残存していることを確認した¹²⁾」と結論した。1983年当時の、地表観察による所見と齟齬しない。

ところが、『志段味古墳群』の別の執筆担当者が、同書の成果を商業出版に流用した際に、「大久手5号墳は、大久手池堤防により半壊するが、地籍図などから、帆立貝式古墳であ

ることが指摘されてきた¹³⁾」と記すことがあった。前半部分を直訳すると、「大久手池堤防により半分壊れるが」であり、1983年当時の所見ならびに『志段味古墳群』の結論を否定している。半壊の根拠は示されていない。さらにこの執筆担当者は、『志段味古墳群』で「大久手5号墳は大久手池堤防に覆われており¹⁴⁾」と書いてもいた。「堤防に覆われて」と「堤防により半壊する」とは、同義なのであろうか。

この不明は、直接に『志段味古墳群』の問題ではないように見えるが、『志段味古墳群』に胚胎していた問題が、この執筆担当者をして現前せしめたと洞察するのが妥当である。リテラシー、簡潔に言えば読み書き能力の過失と言ってよい。

4) 東谷古墳群

東谷古墳群では、既知の古墳の位置確認と新規発見を目的にする分布調査がおこなわれた。『志段味古墳群』は、『守山の古墳¹⁵⁾』の記述と、筆者の「古墳時代¹⁶⁾」(本節のみ、以下「古墳時代」と称する。)を、批判的に検証しながら行文する。

筆者が関与したものについてあらかじめ陳べると、「古墳時代」の古墳の位置は、『名古屋市遺跡分布図(守山区)¹⁷⁾』(以下、『分布図(守山区)』と称する。)と、その原図に相当する分布調査の際の地図¹⁸⁾の写本(以下、「原図写本」と称する。)を踏襲していた。正確に言えば、1984年の名古屋市博物館部門展『守山の遺跡と遺物』を準備する途上、文化財保護行政と博物館行政とに齟齬が生じないようにするため¹⁹⁾、分布調査の担当者から精緻な助言とデータ提供を受けて作成した同展図録²⁰⁾の諸図を、一定の改変をおこない「古墳時代」に延長したのである。総じて、筆者の『守山の遺跡と遺物』と「古墳時代」は、『分布図(守山区)』と「原図写本」など名古屋市見晴台考古資料館のデータに基づくものであった。ただし、34号墳のように分布調査後に確認されたものを追加している。無論、記載ミスや印刷上の版ずれ等の可能性は排除できない。感興を惹いた箇所は、次のとおりである。

東谷2号墳について『志段味古墳群』は、「市史の位置は誤りで、より北側の宅地部分と思われる²¹⁾」とした。しかし、2号墳の位置は、『分布図(守山区)』では「古墳時代」と「想定位置²²⁾」の中間にあり、「原図写本」では「古墳時代」の位置に等しい。したがって、「古墳時代」が誤りであったならば、それ以前に「原図写本」が誤りであったことになる。名古屋市見晴台考古資料館内部の、データ正誤としておこなわれるべきであった。

東谷27号墳については、「分布台帳と同地点であることは写真で確認できるが、そのポイントは『守山の古墳』『市史』ともに200mほど異なる²³⁾」と書く。出典明示のない「分布台帳」とは、『分布図(守山区)』を作成した際の分布調査のそれであろうか。写真の詳細は不明だが、これも「異なる」ならば、名古屋市見晴台考古資料館内部の、写真と『分布図(守山区)』『原図写本』との異同となる。

東谷33号墳について、『守山の遺跡と遺物』(名古屋市博1984)中の図に初めて登場した古墳で、その後1990年の分布地図では滅失扱いとなっている²⁴⁾と書くが、虚偽である。同墳は、『分布図(守山区)』に初出する。ちなみに、「遺跡番号/区|県|遺跡名称|種別|所在地|立地・地目|出土遺物及び遺跡の概況|時代|備考」は、「1-30|—|東谷山33号墳|古墳|大字上志段味字東谷2109|丘陵斜面、雑木林|石室石材が丘陵斜面に広範囲にわたって散在している。少なくとも1基以上の古墳の破壊が考えられる。|古墳|滅²⁵⁾」と書いており、1979年度の時点で滅失している。もはや学の名に値しない、リテラ

シー未満の児戯である。

3. 第2の検討

第1の検討で明らかになった『志段味古墳群』の問題点は、技術的には正誤表等によって解消されるであろう²⁶⁾。本稿は、それを求めることをしない。また、ありていに言えば「非科学的な考古学」を目撃したことにもなるが、この場合も、科学的な考古学を本稿は求めない。なぜなら、当事者が科学とは無縁でトンデモ能くすることにその意あれば、当該要求はあらかじめ失効しているからである。本稿は、『志段味古墳群』の問題点が、そして非科学的な考古学が、そこに存在したことの理由性動機²⁷⁾を問う。

ここで想起するのは、「経験と歴史が教えてくれるのは、民衆や政府が歴史からなにかを学ぶといったことは一度たりともなく、歴史からひきだされた教訓にしたがって行動したことなどまったくない²⁸⁾」である。これを参照するとき、『志段味古墳群』の意味とは「経験と歴史の断絶」にあるのではないかとの仮説が惹起する。そしてただちに、『志段味古墳群』の内外を横断する次の徴証が、この仮説を支持してゆく。

1) 文化財保護の断絶 (1)

「志段味古墳群」は、2000年代に再発した名称である。これ以前、志段味・吉根地区の古墳群の名称は、1963年名守合併以前の守山市時代以降、調査者等により小字名を冠する命名法によっておこなわれてきた。守山、小幡、大森など守山市のほかの地区では大字名を冠しているが、それらの地区に比べ、志段味・吉根地区の古墳群の分布が複雑であり、それに対応する命名であったことを暗示している。そして往時も現在も、大字名に上・中・下志段味はあっても単なる「志段味」はほかになく、これが用いられることはなかった。

「志段味古墳群」を、3地区の一括と理解した場合、中・下志段味地区の古墳群も「志段味古墳群」となる。守山市以前の志段味村を引用したものと理解した場合は、さらに吉根地区をも含む。いずれの場合も、「志段味古墳群」の名がはらむ論理には、初期調査者の苦心やデリカシーが失われており、たとえば名古屋市内にある古墳を一括りにして、「名古屋古墳群」と呼ぶことを許す暴力性がある。そのまなざしは、帝国的とも言えよう²⁹⁾。

「東谷山古墳群」も然りである。「東谷山」は山の名称であり、この山の古墳群と言った場合、東谷山西麓の白鳥古墳群、狸塚古墳群も含まれて、これらは支群となる。東谷古墳群も東谷山の古墳群の支群であり、『守山の古墳³⁰⁾』は正しく分類していた。しかし『志段味古墳群』は、山の名称「東谷山」と小字名「白鳥」「狸塚」とを並列させる一方で、小字名「東谷」を排除して、当初の論理整合性を破壊するのである。

顧みると、「東谷山古墳群」の名称は、『分布図（守山区）』で定着した³¹⁾。ところがこれは、守山区遺跡分布調査の担当者が、「東谷古墳群」を「東谷山古墳群」と勘違いしたことによるものだったのである。そのことを筆者と担当者が確認した際、次の改定の機会に修正する旨担当者は約し、それまでは『分布図（守山区）』にしたがい「東谷山古墳群」を用いることにした。筆者が、『守山の遺跡と遺物³²⁾』などで「東谷山古墳群」を用いたのはそのためである。なお、担当者が1983年に死去したこともあり、『分布図（守山区）』の修正はおこなわれていない。筆者は、「古墳時代³³⁾」で「東谷古墳群」の名称に復した。

「志段味古墳群」と「東谷山古墳群」の名称は、「経験と歴史の断絶」である。論理矛盾を起こしてまでする改名には、敵味方を示してはいないが「名指す政治」が強く感じられる。社会教育ではない、行政主導の「歴史の里」だからであろうか。いずれ単独の行政区（たとえば「名古屋市志段味区」）になることが、ここには先行的に埋め込まれているのかもしれない。その自覚、無自覚を問わない、断絶への「欲求」が見てとれるのである。

2) 文化財保護の断絶 (2)

『志段味古墳群』に記載された志段味大塚古墳の調査は、範囲確認、1923年調査トレンチ再検出、埋葬施設検出、土取跡精査・盛土の4項で、このうち埋葬施設検出は新規に検出し、掘削をしている。文化財保護の思想上、行政上、古墳主体部の検出と掘削は、破壊の予定や徴候が認められる場合と学術目的の場合におこなわれることを通有とするが、それに照らすとき、志段味大塚古墳での第2埋葬施設の扱いは意外であった。

土取跡の崖面に破壊の徴候を評価することは可能である。しかし、完掘していないことから推すと破壊は喫緊の課題ではなかったとみなせる。また、土取跡に盛土して崩落防止策を講じてもいるため、第2埋葬施設を掘削する前提は希薄である。このような矛盾撞着しながら掘るさまには、学的動機の不明が嗅げり、「掘るだけ³⁴⁾」に似寄る。「なら掘らんでもいい話³⁵⁾」であろう。これは、地方行政における文化財保護の断絶は言うに及ばず、中央行政においてもそれが進行していることの証しなのかもしれない。

3) 文化財保護の断絶 (3)

文化財保護の断絶は、天白・元屋敷遺跡破壊事件が明証する。天白・元屋敷遺跡は、上志段味に西接する中志段味の遺跡で、1979年度の名古屋市教育委員会の遺跡分布調査で初めて確認され、同委員会による発掘調査が数度にわたっておこなわれてきた。区画整理事業に際しては、「埋立保存」する旨同委員会が強弁していた遺跡である。その遺跡が、2010年から翌年にかけて広範囲にわたり破壊された。「埋立保存」の強弁をも裏切る、地山から根こそぎの破壊に見舞われたのである。

事件は、2011年6月13日付の「野田農場ホームページ／農場だより」に「土器」の記事と写真が投稿されて公然となった³⁶⁾。筆者は、これをコメント付きリツイートしたのち³⁷⁾、同月15日に現地で遺物を実見し撮影する。そして、13日の野田農場のツイートにリプライするとともに³⁸⁾、遺物の写真10点をFlickrに投稿した³⁹⁾。以後、事業主体と名古屋市教育委員会とのあいだで折衝がはじまり、前代未聞の「遺物回収作業」ほかの調査にいたる⁴⁰⁾。

天白・元屋敷遺跡は、『志段味古墳群』刊行にいたるまでの数年間、数多関係者が繁々過ぎたであろう地区にある。しかもそれは、上志段味の古墳群と歴史社会的に密接な関係が予想されもしてきた。さかのぼれば、名古屋市教育委員会史上初となった遺跡分布調査の最初のひとつが守山区だったのは、志段味・吉根地区の特定土地区画整理事業を想定していたからである。その象徴的な成果が、この遺跡—最初の名称は中志段味A遺跡—の発見であった。それを、根こそぎ破壊したのは、文化財保護の断絶、否定、破壊と言わずして何と言おう。畢竟、『志段味古墳群』は、天白・元屋敷遺跡破壊と一対だったのである。

4) 諸学との断絶 (1)

『志段味古墳群』には、「上場」「下場」の熟語が頻出する。詳しくそれらを追跡してはいないが、西大久手古墳と東大久手古墳の章の本文・図中によく見られた。執筆担当者のリテラシーのほどは知らぬが、斟酌すると、それぞれ「上端」「下端」のこのように思われる。この印象が正しく、それらが誤用、誤記、誤変換等であったならば、建築の技術、学問との断絶が端なくも露呈したと言えるだろう。建築の技術、学問との断絶とは、ひいて言えば建築思想さらには現代思想からの断絶を意味する。

5) 諸学との断絶 (2)

「歴史の里」の宣伝には、公式イメージキャラクター「しだみこちゃん」が用いられているが、その名称、図像から女性の表象とみなせる。なぜ、女性でなければならず、男性や第三の性ではなかったのか。あるいは、名古屋市博物館企画展「尾張氏☆志段味古墳群をときあかす」のイメージキャラクターが男性（「あそくん」）であり、これを動員して男女共存を言うのかもしれないが、位置づけ、出現頻度は圧倒的に「しだみこちゃん」が優勢であり、両者は社会的対等関係にない。無論その場合も、第三の性は排除されている。なお、「しだみこちゃん」の名称、図像は神道系であり、宗教多様性との断絶をまったくしていることは、指摘するまでもない。かくして、排外主義の権化のような「しだみこちゃん」なのである。

一方で「あそくん」は、「志段味大塚古墳の副葬品をもとに製作した⁴¹⁾」とあった。デフォルメされたキャラクターのみならず、同展ポスター等の図像も挂甲を装着した騎乗の男性像のようである。志段味大塚古墳から挂甲小札が出土しているため、「あそくん」等の挂甲図像はこれの表象と思われるが、被葬者の性別は判明したのだろうか。関係者が、挂甲、武具イコール男性とみなしたならば、ジェンダー研究の経験との断絶は否めない。前節で見た現代思想からの断絶は、このようにして実現されていると言えるのである。

4. おわりに

「歴史の里」計画が具体化してゆくことについて、江戸時代から続く地元の農家で、いまでは数少ない専業として営農する30年来の知人に感想を求めたところ、「誇りに思う」との即答を得ることがあった。期せずして、彼の長女が「歴史の里」を「地域にとって誇れるもの⁴²⁾」と書いているのにも接した。彼は、中学生のときに、地元の古墳の発掘調査に参加している。彼女もまた、幼少時から地元の神社のお神楽の伝承などに携わってきた。ふたりのように、この地域の旧住民の生活世界には、当該地域の歴史や民俗は断絶なく接合していたはずである。そこには、特別な観念操作も必要なかったであろう。しかし、区画整理が進み、志段味・吉根地区の自然、歴史、民俗の現状は大きく変わりつつある。旧住民は棄農し、新住民が激増して地域社会は劇的に変化し、地域の生活世界の経験は物質的、精神的に断絶した。この断絶から古墳・古墳群を再編するのが、「歴史の里」である。向後、「歴史の里」が何をもたらすのかは不明だが、「経験と歴史の断絶」を能くした『志段味古墳群』に拘束されているという事実は未来永劫動かない。

たとえば、『志段味古墳群』と天白・元屋敷遺跡破壊とが一对であったことが、断絶さ

れたサンプルであることを「歴史の里」に強いるであろう。これが初めてではない。今日の見晴台遺跡の端緒たる1971年の史跡公園計画もまた、1972年の桜本町遺跡破壊⁴³⁾、1974年の六本松遺跡破壊⁴⁴⁾と一体であった。文化財保護の厚遇／冷遇という南北問題が、隣接して発生した共通も指摘しておこう。見晴台と「歴史の里」の意味は、冒頭に記した「調査され破壊され尽くした累々たる遺跡」、ひとこと「断絶」に還元されるのである。

断絶は、断絶であるがゆえに、何度でも繰り返かえす。考古学者の藤森栄一は、「古墳の研究史は、盗掘の歴史につきる⁴⁵⁾」と書いたが、「盗掘」という断絶が何度でも繰り返かえされて、断絶が断絶でないかのような錯視、つまり「古墳の研究」が出来する。このように読みかえるとき、『志段味古墳群』—「歴史の里」の意味は、より鮮明となるはずである。

そして「歴史の里」の断絶は、『志段味古墳群』の終末で動員された「倭王権」「尾張氏」が糊塗しもする。「倭王権」は現在の観念である。現在の知恵と言ってもよい。それに対し、「尾張氏」はそれが創作された時期の観念、知恵である。これを用いて、現在の観念、知恵とする、あるいは現在の観念、知恵と平衡させるのはナイーブに過ぎる。

「考古学的データは抽象的な型式である⁴⁶⁾」。オブジェクトレベルから帰納する抽象が不能または不十分なとき、当事者の自覚の有無にかかわらず、考古学は思考停止して、メタレベルの援用という演繹に走る。これが、「尾張氏」の理由である。ここにも、諸学の一たる歴史学の経験、史料批判からの断絶が見てとれるが、それ以上に、構造しかない⁴⁷⁾神話的、系図的とも言える歴史の予兆が感じられる。サブカルチャー化、トンデモ化である。

考古学、文化財保護の中枢は、空洞化しているのであろう。昨今、「歴史の里」PRのメディア（アイドル、キャラクター、グッズ、Facebookの「いいね!」、Twitterの「フォロー」等々）のステレオタイプと喧噪に当該自意識の過剰を感じるのも、空洞化ゆえのことかもしれない。しかし、空洞であろうとなかろうと、断絶があろうとなかろうと、リテラシーがあろうとなかろうと、中枢は中枢であり続ける。それは、情報こそが権力だからである。発掘は、情報を排他的特権的に新規創出、創作する。そして、排他的特権的な操作がこれに続く。ならば、第1の検討でリテラシーの問題とした現象は、ゾーニング、フィルタリングとみなすこともできる。私たちは、一定の情報から隔離され、または選別された一定の情報を与えられているとも。かくして流通された情報は物象化し、周縁に人びとを従属させて、彼、彼女を後進化、低開発する⁴⁸⁾。これが、『志段味古墳群』—「歴史の里」の属性である。

さて、中枢の空洞は何を呼び込み、自らを満たすのであろうか。そう問うとき、天皇制を内面化した敗戦前の歴史の再演を想起するのは容易い。もちろん、「変種や粧いを変え⁴⁹⁾」て。ポップに、キッチュに⁵⁰⁾。

40余年前に筆者たちは、国家独占資本主義段階の考古学を「職人の考古学」と「趣味の考古学」の矛盾としてとらえ、「大衆の考古学」の創造によってこれの止揚を構想し、実践した。そしてもし、大衆の「エネルギーを無視するならば、(主観的に)、この強大なエネルギーは、国家によるナショナリズム高揚政策に呼応し、下からのファシズムとして、非科学的な考古学を導き出し、アジアへの侵略戦争へ積極的に協力することになるだろう⁵¹⁾」と書いた。ことほど左様に、『志段味古墳群』が意味した「経験と歴史の断絶」、非科学的な「考古学」は、昨今の安倍政権と民間ファシズムによる、対中国を頂点とした戦争機運醸成および戦争体制整備としての中央集権強化と、よく同期するのである。

本稿は、『志段味古墳群』の歴史的社会的諸関係の総体をここに定位するとともに、志

段味・吉根地区の「古墳の民俗学⁵²⁾」を所期し、結びとしたい。

注

- 1) 名古屋市見晴台考古資料館編『志段味古墳群〔本文編〕』（名古屋市文化財調査報告79、埋蔵文化財調査報告書62）、名古屋市教育委員会、2011年、同『志段味古墳群〔図版編〕』（名古屋市文化財調査報告79、埋蔵文化財調査報告書62）、名古屋市教育委員会、2011年。
- 2) 『志段味地区文化財の取り扱いについて』、名古屋市文化財調査委員会、1981年。
- 3) 吉田富夫「埋蔵文化財のはなし—歴史のなぞとその解明—」名古屋市教育委員会事務局総務部調査企画課編『教育だより』昭和45年1月号、名古屋市教育委員会、1970年、4-9頁。
- 4) たとえば、「歴史の里」の目標のひとつに掲げられた「志段味地区のシンボル・モニュメントとしての活用」（名古屋市見晴台考古資料館編『志段味古墳群〔本文編〕』、前掲書、6頁）は、「名古屋市守山区・上志段味地区は都心から12～15kmの距離に位置する／「尾張のあすか」とも呼ばれるほど伝統のある地域です。／豊かな自然環境が多く残り、利便性にも優れた住環境の整った上志段味が／「住む」「働く」「憩う」が融合した、理想の暮らしを叶えます」（「KamishidamiB3.pdf」、<http://www.kamishidami-kukaku.jp/search/KamishidamiB3.pdf>（2013年12月10日））という保留地処分のセールスに対応する。
- 5) 『志段味の古墳を見て歩こう！』、住民本位で区画整理を考える会、1982年、18頁。
- 6) 名古屋市見晴台考古資料館編『志段味古墳群〔本文編〕』、前掲書、178頁。
- 7) 同書、178頁。
- 8) 同書、181頁。
- 9) 『志段味の古墳を見て歩こう！』、前掲書、18頁。
- 10) 犬塚康博「守山で古墳発見」『名古屋市博物館だより』第34号、名古屋市博物館、1983年、4頁。
- 11) 同「古墳時代」新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第1巻、名古屋市、1997年、371頁。
- 12) 名古屋市見晴台考古資料館編『志段味古墳群〔本文編〕』、前掲書、188頁。
- 13) 瀬川貴文「志段味古墳群からみた尾張の古墳時代」赤塚次郎編『尾張・三河の古墳と古代社会』（東海の古代③）、同成社、2012年、141頁。
- 14) 名古屋市見晴台考古資料館編『志段味古墳群〔本文編〕』、前掲書、360頁。
- 15) 『守山の古墳』、守山市教育委員会、1963年、34-48頁。
- 16) 犬塚康博「古墳時代」、前掲書。出典に詳記がないが、「図4-29 東谷山西麓の古墳分布図（番号は古墳の号数）」（同論文、438頁）を対象にしているものとして取り扱う。
- 17) 『名古屋市遺跡分布図（守山区）』、名古屋市教育委員会、1980年。
- 18) 名古屋市計画局都市計画課『上志段味』（1：2,500／名古屋都市計画基本図／VII-MD 77-3）、財団法人名古屋都市整備公社、1977年、に作業上の書き込みが加えられたもの。
- 19) 名古屋市見晴台考古資料館と名古屋市博物館は名古屋市教育委員会に属するが、ラインすなわち部が異なっていた。資料館館長は社会教育部長已下の文化財保護課課長が兼務し、博物館は副館長じしんが部長級であった。なお、いまの制度、職員意識は知らない。
- 20) 名古屋市博物館編『守山の遺跡と遺物 部門展「身近なまちの考古学—守山の遺跡と遺物」展示図録』、名古屋市博物館、1984年。
- 21) 名古屋市見晴台考古資料館編『志段味古墳群〔本文編〕』、前掲書、305頁。
- 22) 同書、306頁。
- 23) 同書、306-307頁。
- 24) 同書、307頁。
- 25) 「守山区埋蔵文化財包蔵地一覧」『名古屋市遺跡分布図（守山区）』、前掲図、裏面。
- 26) 2013年7月3日から同17日にかけて、国立国会図書館関西館蔵書（XC/N11/12462）を網走市立図書館で閲覧した。さらに同年11月21日、名古屋市市民情報センターで同センター蔵書を閲覧した。いずれにも、正誤表などの付属物はなかった。
- 27) 廣松渉・山本耕一『唯物史観と国家論』（講談社学術文庫882）、講談社、1989年、27-28頁。
- 28) ヘーゲル『歴史哲学講義（上）』（岩波文庫青629-9）、長谷川宏訳、岩波書店、1994年、19頁。
- 29) 「志段味古墳群」の使用は、澄田正一「尾張」後藤守一編『日本考古学講座』第5巻（古墳時代）、河出書房、1955年、118-123頁、下津谷達男「東海地方」大場磐雄・内藤政恒・八幡一郎監修『新版考古学講座』第5巻（原史文化〈下〉）、雄山閣出版株式会社、1970年、91-116頁、のような概論でおこなわれていた。
- 30) 『守山の古墳』、前掲書、34-48頁。
- 31) 吉田富夫は「東谷山古墳群」を使用しているが、峰上の古墳も含めており、「東谷山の古墳群」の意である。吉田富夫「東谷山古墳群」『名古屋の史跡と文化財』、名古屋市教育委員会、1970年、2-3頁、など参照。

- 32) 名古屋市博物館編、前掲書。
- 33) 犬塚康博「古墳時代」、前掲書、327-461頁。
- 34) 藤森栄一『考古学・考古学者』、学生社、1974年、9頁。
- 35) 同書、9頁。
- 36) 「土器」『野田農場ホームページ／農場だより』、2011年6月13日、<http://noda.orenest.net/diary/mailbbs.php>(2011年6月13日)、野田農場 @noda_farm「Twitter / noda_farm: 土器：五朗君が造成地から拾ってきました。郷田郷畑の大切土をは...」、2011年6月13日、https://twitter.com/noda_farm/status/80268917439873024(2011年6月13日)、同「土器：五朗君が造成地から拾ってきました。郷田郷畑の大切土をはがして池のようにし、造成地に捨てた土の中から拾ってきた土器です... on Twitpic」、2011年6月13日、<http://twitpic.com/5b0u9q>(2011年6月13日)。
- 37) ore nest @ore_nest「Twitter / ore_nest: もっと古いものがあります。とても気になりますので、15日以降...」、2011年6月14日、https://twitter.com/ore_nest/status/80299862675038208(2011年6月14日)。
- 38) 同「Twitter / ore_nest: @noda_farm 奈良・平安どころではありませんでした。...」、2011年6月15日、https://twitter.com/ore_nest/status/80954941572788224(2011年6月15日)。
- 39) INUDZUKA, Yasuhiro「中志段味「郷畑」の遺物 - a set on Flickr」、2011年6月15日、<http://www.flickr.com/photos/orenest/sets/72157626967854052/>(2013年12月10日)。
- 40) 株式会社二友組編『天白元屋敷遺跡』、名古屋市中志段味特定土地区画整理事業組合、2012年。
- 41) 森田まより「名古屋市博物館／尾張氏☆志段味古墳群をときあかす | モリマヨブログ」、2012年5月27日、<http://ameblo.jp/mayori-morita/entry-11262207640.html>(2013年12月10日)。
- 42) 野田留美「歴史の里にて秋祭りが開催されました。」『愛知県議会議員 野田るみホームページ ブログ』、2013年10月15日、<http://www.nodarumi.com/mailbbs.php>(2013年10月15日)。
- 43) 「「桜本町遺跡」の破壊に関して」伊藤禎樹・犬塚康博・岡本俊朗・小原博樹・斎藤宏・桜井隆司・村越博茂・安田利之『見晴台と名考会に関する問題提起—その2』、1972年、17-22頁。
- 44) 「名古屋市における埋蔵文化財問題について」『連絡紙 年魚市』創刊号、(仮称)昭和堂クラブ、1974年、5-24頁。
- 45) 藤森栄一、前掲書、215頁。
- 46) V. G. Childe『考古学の方法』、近藤義郎訳、河出書房新社、1964年、17頁。
- 47) 大塚英志『更新期の文学』、春秋社、2005年、柄谷行人・大塚英志「「努力目標」としての近代を語る」大塚英志編『新現実』vol. 5、太田出版、2008年、6-48頁、参照。
- 48) 「連帯」編集部編『新帝国主義論争』(連帯No. 4)、亜紀書房、1973年、野崎六助『ブランコに乗る子供たち—ポストモダンの若者学』、時事通信社、1988年、参照。
- 49) 廣松渉『〈近代の超克〉論』(講談社学術文庫900)、講談社、1989年、84頁。
- 50) たとえば、前出展覧会キャラクター「あそくん」の「名前は、5世紀に允恭天皇に仕えたとされる「尾張連吾襲」(『日本書紀』)にちなんだもので(森田まより、前掲HTML文書)あった。名古屋市博物館は、遺跡・遺物と神話とを短絡し、さらに天皇名を明記して、中央—地方にとどまらない中枢—周縁の政治・経済・文化的システムにおける主従関係を言挙げ、その権力の場へと観覧者を動員した。
- 51) 「見晴台発掘と僕達の考古学—「職人の考古学」↔「趣味の考古学」を止揚し、「大衆の考古学」を創造しよう！」伊藤禎樹・犬塚康博・岡本俊朗・小原博樹・斎藤宏・桜井隆司・村越博茂・安田利之、前掲書、6頁。
- 52) 橋本裕之「裝飾古墳の民俗学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、国立歴史民俗博物館、1999年、363-380頁。なお、この論文で橋本は、「地域社会における古墳の受容史を解明する必要性を強調した柳田や芳賀の挑発的かつ威嚇的な提言は、考古学の領域において少数の例外を除けば、今日でも十分に汲みあげられていないといわざるを得ないのである」(同論文、367-368頁)と指弾し、「少数の例外」の先駆例に、東谷16号墳を調査した吉田富夫らの問題提起(吉田富夫・伊藤敬行・七原恵史「東谷第16号墳」名古屋市教育委員会編『守山の古墳 調査報告第二』、名古屋市教育委員会、1969年、64頁)を、その注で掲げた。私も、この吉田の提起を敷衍したことがある(「椀 小皿 小椀」名古屋市博物館編、前掲書、62頁)が、現代史における古墳受容のエスノグラフィーとしての『志段味古墳群』—「歴史の里」の分析は、これへの応答にほかならないのである。

〔付記〕

本稿脱稿直前の2013年12月17日、「市民も古墳発掘体験／守山で全国初 整備計画」という見出しの記事が『中日新聞』朝刊1面トップに掲載された。「歴史の里」計画のひとつ、1時間500円、2泊3日5万円の古墳発掘体験は、全国初と言うより前代未聞である。急ぎ「古墳発掘体験」に反対する(『考古学の風景』、2013年12月19日、<http://archaeologyscape.kustos.ac/2013/12/19/>)を表したが、本稿では触れなかった。稿を改めて論じたい。